

# 哲學研究

第二百三十一號

第二十卷  
第六册

## 積極的事實について

赤松元通

一

此の小論は拙稿「知的直観と辯證法」に於いて述べた「分立の同一」なる考に基づいて積極的事實と云ふものが如何なるものであるかといふことを考へて見たのであるが、最初に此の分立の同一といふ事を簡單にのべておきたいと思ふ。

分立の同一といふ事はシェリングの「自由論」(VII. S. 406ff.)などに述べられたるレアール、イデアールの分立 Disjunktion といふことより來てゐるのであるが、シェリングがそれによつて意味してゐる所のものは凡そ次の如くである。

凡ての他の哲學に對してシェリングの後期の哲學が持つ著しい特徴は、存在するものと存在の根據との區別、神に於ける存在とそれの根據との區別の充分なる認識である、と云ひ得るであらう。此の對立は全く絶對的の對立であつて、決して一方が他方に歸してしまふことは許されない。然し又一方から云ふならば、對立がある以上はそれが出て來た所の根基がある筈である、もしそうでなければ、それは單なる二元論となるであらう。然らばかかる根基に關してはそこにはも早や對立があつてはならない、何となれば對立が始めてそこから起るのであるからである。而かも亦それは全然一であつてもならない、何となれば全然一であるものからは如何なる對立も起ることは出來ないからである。かくの如き根基即ち無底 *Ungrund* については、吾々は勿論、對立せるものとしては賓辭づけることは出來ないが、對立せざるものとして、*als Nichtgegenätze*、換言すれば分立に於いて、そして各々(レアル、イデアール)がそれだけとして獨立に賓辭づけられることは差支ない。此の分立といふ點に二元性即ち原理の眞の二元が定立せられるのである。かくの如き分立的な賓辭を許すところの根基が無差別 *Indifferenz* である。即ちこれに於いては對立は分立して決して同時にあるのではない。此れに反して同一 *Identität* といふのは對立が對立と

して同時的となり、即ち實になり、而かも此れが結び付けられたる状態を云ふのである。分立としての無差別がなければ決して原理の二元は存しない。此の無差別の分立から直接に二元が始まるのである。此の言葉の根據については大體以上の如くである。

扱て分立といふことは一面から云へば對立がないといふ事である。何となればそこでは對立するものが同時に、むしろ共にあるのではなくして、分れてあるからである、レアルがある時にはイデアールがなく、イデアールがある時にはレアルがないと云ふ風に。従つてそこにあるものとしてはレアルか、若しくはイデアールかであり、そして何れにしてもそれがそこでそれだけで獨立で全體としてあるからである。然し又一面から云へば分立と云ふ事は最も深い意味での對立を意味する。客觀的に與へられたる對立、ノエマ的なる對立は對立するものが同時にそこにある對立であるが、かかる對立はそれら對立が共に、よつて立つ所の地盤が與へられることによつて、換言すれば、それら對立を結びつける様な媒介が見出される事によつて、綜合せられ、止揚せられる。而かもかかる媒介、即ちそれら對立を包む様な地盤は、それら對立が對象的に與へられる限りは、同時に又與へられて居るのである。例へば

赤と赤でないもの例へば白との對立が兩者を包む色なる媒介によつて止揚せられる如きである。

かくの如き對立は然し眞の對立ではない。眞の對立はかくの如き對象的なるものの絶對的な否定に於いて始めて現はれる。媒介するものがある様な對立は尙ほ眞の對立ではない、單に相對的な量的對立にすぎない、眞の對立は絶對的に斷絶的な無媒介的なものでなければならぬ。かくの如き眞の對立を吾々は「分立」の中に見るのである。何となれば分立といふのはレアールとイデアールとが同時に共にあるのではなくして、絶對的に分離して、一方がある時にはそれだけが全體で獨立であり、従つて他方は全然否定せられ、絶滅せられてゐるからである。然し此のことも勿論一方を肯定して後に他方を否定するとか、又は一方を否定して後に他方を肯定するとか云ふのではなく、一方の肯定が直ちに他方の否定であり、一方の否定が直ちに他方の肯定を意味するのである。一方が絶對に死ななければ他方は生じないのである。而かも此の對立は單にノエマ的に見れば決して見られないのであつて、レアール、イデアールの云はば轉換の根基に於いて、それらがその根基に對する關係に於いて始めて見られるのである、即ちノエシス的にのみ見られるのである。分立に於け

る對立は全く絶對的である。兩者は各々それだけで獨立で、全體であるが故に、所謂媒介を容れる餘地はない、唯だ一方が絶對に死することによつてのみ他方が絶對に生きることが出来るのである。

かくの如く分立に於いては一方から云へばそこには對立がないといふ事が云ひ得ると共に、他方から云へば却つて眞の對立がそこに現はれると言ひ得るのである。しかのみならず吾々は更に進んで此の分立にこそ眞の同一があると考へるのである。

何となれば眞の同一とは客觀的に對立せるものが一つであると言ふことでもなく、或は又、或るものが唯だそれ自身に同じといふが如き、單なる物の自己同一や、或は内部知覺の連續的同一といふ事でもない。即ち同一と云ふ事は單に對立が無いと云ふことではない。絶對的に對立のないものから如何にして對立が、従つて運動や變化や發展が生ずるであらうか。かくの如き同一は云はば死せる同一である。眞の生きた同一はそれから對立が、生成が生まれるものでなければならぬ。かくの如き生ける同一は對立が對立としてはなく、唯だ非對立として、即ち分立としてある所の同一でなければならぬ。對立が分立としてあるといふことが却つて對立が眞の

對立としてあり得同時に又眞の同一としてあり得る所以であるのである。分立として絶對的に對立するが故に、一方が死することによつて直ちに他方に移りうるのである。一方から直ちに他方に移りうる云ふことこそ眞の同一の意味でなければならぬ。ノエマ的に、靜的に考へられた同一は尙ほ眞の同一ではない、眞の同一はノエシス的に、動くこと、移り行くことに於いて見られるのである。分立としてあると云ふことは絶對的に反對なるものへ直ちに移り行くことと云ふ事であり、そして此の事こそ眞の同一としてあるといふ事である。

分立といふことは勿論、これかあれかといふ事より來てゐる。此の點より云へば分立と云ふ事の中には選擇の意味が含まれてゐることは明かである。然し此の選擇は決して普通の意味の選擇ではない。普通の選擇は選擇するものと選擇せられるものとは全く別で、選擇せられるものは可能性としてそこに與へられてゐる、選擇するものは此れらの中の何れかを選択するのである。此の場合一見選擇の自由がある様であるが、選ばれるものは選ぶものに對して外的であるが故に、選擇は外的事情に支配され、従つてそれは不自由で、偶然的と考へねばならぬ。吾々の云ふ「これかあれか」即ち分立は決してかかる選擇を云ふのではない。強ひて名づくるならば絶

對的選擇である。これ或はあれは初めから對立して、對象的に與へられてゐるのではない。これもあれも絶對自由者の意志的行爲によつて始めて定立されるのである。一一の定立が凡て皆絶對自由の行爲なるが故に一一の定立が皆絶對的創造である。選ばれるものは選ぶものの外にあるのではなくして、兩者は一つである、否選ばれるものはその選擇そのものによつて始めて「これ」として定立せられるのである。従つて選ばれるといふよりも、むしろ一一のものが凡て皆一瞬一瞬に死して又新しく生れるといふ方が適切であるかも知れぬ。絶對的選擇はかくて一一が絶對的否定であると共に創造である。何故に選擇と云はれるのであるかと云へば此の行爲に於いては一方の定立が直ちに他方の否定であるからである。「これ」を否定することが反面に於いて「あれ」の定立であるからである。「これ」と「あれ」とを同時に定立するのではなくして「これ」か「あれ」か一方をとらねばならぬからである。而かもこれを取ることはあれの死を、あれを取ることは此れの死を意味してゐるからである。此處に選擇の意味があるのである。

此のこれかあれかの對立が即ちレアル、イデアールの對立に外ならぬ。レアル、イデアールは同時に立つのではなくして分れて立つのである、而かもレアル、イ

デアールは絶對的の選擇によつて定立されるが故に、それは又絶對的、即ちその各々が全體にして獨立でなければならぬ。此の分れて立つと云ふことは反面から云へば相互に否定すると云ふことである、デアールはイデアールをイデアールはデアールを否定する、各々は自らが立つ爲めには他を否定しなければならぬ、各々は自らを否定することによつて他を生かしうるのである、分れるといふことは否定があるからである。然らば此の否定の根源は何であるか。此の否定は成程表面的に見れば唯だデアールがイデアールを、イデアールがデアールを否定する如くに思はれる。然し實はデアールがイデアールを否定するのは單にデアールがイデアールを否定するのではなくして、むしろデアール、イデアールの底から働いてくるのである、それがデアールを通して否定するのである、暗き闇の原理は直ちに兩者の同一的根柢である。イデアールがデアールを否定する場合も同様である。

シエリングは前に述べた如く無差別、従つて分立といふ事と同一と云ふことを區別せんとしたが、吾々はむしろ無差別にも同一にも、かかる分立による眞の同一を根基としたいと思ふ。吾々は此の無差別と同一とを二つの別個の状態とせずして一つの具體的なるものの二面として見たいと思ふ。



シェリングによれば所謂對立以前の無差別なる無底に對しては唯だレアール、イデアールの分立的なる賓辭づけが許されるに對して、レアール、イデアールの對立が同時になり、實になる所の對立以後に於いては愛なる働きによつて兩者は眞に結びつけられる。此處に於いては對立は對立としてあり乍ら、而かも絶對的に結びつけられてゐるのである。此の状態が眞の同一であり、此れが眞の愛に外ならぬと考へられた。

然しシェリングの此の對立以前の抽象的なる無差別と、對立の統一としての具體的なる同一とは、成程概念的には勿論明かに區別せられなければならぬのであるが、然し實は此の二つのものは決して全然別の存在なのではなくして一つの具體的なる根基の見方の相異、もしくは立場の相異と考へることが出來ると思ふ。即ち此の根基をノエマ的に見るか、ノエシス的に見るかによつて無差別として現はれるか、同一として現はれるかするのである。此の根基、即ち分立の絶對的同一をノエマ的に見るならば既に屢々述べた如く、レアール、イデアールは同時にあるのではなく、一方の否定によつて一方のみがあるのであるが故に、そこには對立は見られない、そこには無底としての無差別があるのである。然し此の根基がノエシス的に見られる時、

そこには眞の對立が現はれる、所謂實なる、同時的 *zugleich* な對立が現はれる。同時とは決して單に時間的に同時、即ち對立するものが二つ乍ら對象としてある、と云ふ如き意味ではなくして、——もしそうであるならば此れは再びノエマ的な對立に墮してしまふであらう——むしろ此の意味はレアル、イデアールを包む、従つて兩方を否定しうる所の兩者の同一的根基に於いて兩者が自覺されることを意味すると思ふ。要するにノエシス的に見ることによつて始めて眞の對立が實になり、眞の對立が現はれることによつて、又その眞の根基としての同一が自覺せられる、此れが眞の愛に外ならぬ。愛によつて對立が結びつけられるのである。而かも此の愛は對立以外から與へられて、それらを結びつける如きものではなくして、眞の對立そのもの、分立そのものが直ちに愛なのである、分立する働きが即ち絶對的同一の働なのである。

かくの如く見るならば無差別と同一とはむしろ一つの具體的なる根基の二面として、即ちそのレアル面とイデアール面として考へることが出来るであらう。愛が具體的になるといふことはノエマ的な立場からノエシス的な立場に轉ずることである。「無差別」の立場にあつては對立がないと考へられるが故に、従つて又

愛がないとも考へられるでもあらうが、然しシエリングも云ふ様に (VII. S. 406) 存在者とその根柢とが分たれる以前にも勿論愛はあつたのである、だが然し愛としてではなかつた、唯だ吾々は此れを何と名づくべきであるかを知らないのみである。

## 二

扱て事實とは一體何であるか。机の上に數冊の書物がある。窓の外では子供らが嬉戯し、向ふの緑の山の上には白雲がちぎれ飛んでゐる。これらは勿論事實である。更に私が或事を爲さんと心に決意するのも、或は此れを實際行爲に於いて實現するのも、やはり事實である。然らば事實とは一體如何なるものであるか。又眞に根源的な確實なる事實とは何であるか。

事實とは普通に先づ感官の事實、即ち感性的直觀の事實として考へられる。眼を開けばそこに机があり、書物がある、緑の山があり、白い雲がある。此れらは最も直接なる事實である様である。疑はんとして疑ひ得ない様である。學問的な嚴密な方法として考へられる演繹法や歸納法でさへも、それらの最後の豫想とみられる所の最も一般的なもの、或は最も特殊なるものに對しては、も早や如何ともなし得ない、此れを感官的な事實そのものに於いて實證する外はない、感官の證明などと云ふこ

とが云はれる所以である。

然し乍ら感性的直觀の事實は果たして絶對確實なものであらうか。成程最も直接なるものと云ふ意味に於いては此の事實は如何ともすることは出来ない。此の意味に於いては確實と云ひ得るとしても、此れは決して如何にしても疑ひ得ないものとは云ひ得ない。感官的事實には現に錯覺や幻覺などと云ふものがある。此れらも直接なる感官の立場としては、どこまでも確かな事實であらうが、然し更に客觀的な、反省的な立場から云へば確實性を持たないと云はれるのである。此處に於いて直接なる感官的立場に對して間接なる悟性、思惟の立場が對立するに至る。悟性の立場に高まることによつて感性的直觀の事實は勿論、外的には常識的な言ひ表はしではあるが、何の變化をも受けない。机の上に數冊の書物があり、緑の山の上に白雲が浮んでゐる。然し單なる感性的直觀として見られた場合のこれらと、悟性によつて反省的な媒介によつて、一般的根據を通して見られた場合とは、そこに大なる意味の相違がなければならぬ。

普通には悟性の場合、即ち判断の場合には唯だ抽象的なるS Pの關係のみを考へて、それらの關係する事實の方を輕視、或は無視せんとする傾があるが、然し悟性の立

場と雖も感官の立場を全然離れては無意義であつて、やはりそれが中に取り入れられてゐなければならぬ。唯だそのままに取り入れられるのではなく、否定を通して取り入れられるのである。即ち感官の場合は特殊なるものとして、悟性の表はす一般的關係によつて否定されねばならぬが故である。かく否定を通してではあるとしても、とにかく感官の立場に結びついてゐなければ、悟性の立場と雖も現實的な確實性を與へ得ないであらう。感官と思惟とは此の相互の否定、従つて分立として又直接に同一であると考へられる。後に明かになる様に此の感官と思惟との否定的、分立的統一が行爲に外ならない。悟性の立場に於いては、従つて感官的關係から全く離れてゐるといふよりも、むしろそれによつて裏づけられてゐると云ふべきであらう。

悟性との關係については尙ほ後に考へるとして、感性的事實についても少し考察しようと思ふ。吾々が事實を本當に知ると云ふことはどう云ふことであるか。それは單に外的に與へられたものを知覺するだけではないであらう。例へば書物を眞に理解するとは單にその大きさや形や文字だけを知ることではなくして、それに於いて表はされる所の内的なる意義の理解が根本でなければならぬ。又戦争

なる事實の理解にしてもそうである。一一の攻撃、砲射その他外的な出來事のいくら詳しい記述も尙ほその眞の事實を明かにすることは出來ないであらう。それを知らんとせば、むしろ全軍を統率する將軍の心の中を見るべきであらう。(X. 227) 白雲、綠山なる事實も恐らくかくの如くであらう。白雲も綠山も此れの中に生き得ない人にとつては何の意義もない、單なる外的事實にすぎないであらう。此のものの中に入ることによつて、即ち内的なる事實を見ることによつて、それらは始めて眞に深き意義を表はして來るであらう。「眞の事實は常に内的なるものである。」(X. S. 227)

然らばかかる内的事實とは何であるか。内的事實と外的事實とは如何なる關係があるのであるか。

内的事實は勿論、書物や、白雲や、個々の戰鬪を離れては別に何處にも無いと云はねばならぬ。書物や白雲の中にあるからこそ内的事實である。かかる外的事實の中にあつてかかる外的事實を眞に事實たらしめるものが内的事實に外ならない。内的事實は外的事實を超えて彼岸にあるのではなく、むしろ外的事實の底に見られるものでなければならぬ。

然し底とは一體何であるか。内的事實とは書物をして眞に書物たらしめ、白雲をして眞に白雲たらしめるものであるが故に、云はば此れらの内面的統一の原理と云つてもよいであらう。勿論外的事實に統一がないと云ふのではない、外的事實も一つの統一を持つ。統一のない事實といふものは考へられないであらう。然し乍ら外的事實の統一は例へば物或は自然の統一に於ける如く單に外的な偶然的な統一にすぎない。内的統一とはかかるものに眞の生命を與へるものである、此れに對して意義を與へるものである。かかる統一は、故に、外的事實の統一より見れば外であり、彼岸であるかも知れない。従つて此れは外的事實を外的と見る内界、即ち精神、自我意識など云ふものに求められるのである。然し眞の内界或は意識なるものは、かかる外界に單に對立するものではなくして、むしろ此れの背後にあるもの、此れに對しては唯だ無といふ外ないものであるであらう。外的事實の底とは外的事實そのものがそれに基づいてゐる所のもの、その於いてある場所でなければならぬ。外的事實は單にそれだけとしてあるものではなくして、それをそれとして在らしめる所のものがあるのである。此れがその底としての内的事實である。内的事實はその云はば根柢である。底に徹すると云ふ事は外的事實が自らを否定して、外的

たることに死することである。此處に眞の内界としての自我が表はれる。外的事實或は自然に對して此れの向ふに或は此方に自我或はその作用が内的事實として對立すると云ふのではなく、外的事實の底に即ち外的事實を否定し、此れを突き破るところに内的事實の光が輝くのである。

一體この内と外との對立と云ふことは如何なることであらうか。内と外とが所謂對立に於いて立つ——二つとも向ふに考へられるにしても、或は一方は向ふに、一方は此方にしても、とにかく兩方とも對象的に存在するものとして考へられるが如き對立——ならば、それは決して眞の内と外との對立ではない。内は眞の内ではなく、外も亦眞の外ではない。何となればそれは外と併べられた、従つて外にまで出された内であり、内と考へられた外である、従つてかかる内と對立する外は尙ほ眞の外ではない。眞の外は眞の内に對してのみ對立するからである。眞の内とは決して外にならぬもの、従つて外と所謂對立には立たないもの、外が有とすれば全く有とならないもの、無でなければならぬ。内は外と同じ様に在つてはならぬ。そこにあるものは外だけである、内はむしろ此れの否定に於いて始めて表はれるもの、此れの否定によらなければ決して在らぬものである。外はそれだけとして全體で獨立である、



従つてその側らに決して内があつてはならぬ、何となれば内も亦全體で獨立であると考へられねばならぬからである。外は内の否定によつて、内は外の否定によつて始めて在りうるのである。外と内とはかく各々獨立的全體として互に他を排除しつつ、而かも一方は他方なくしてはあり得ないで、兩者は深き同一的根基に於いて結びついてゐるといふ構造、一言にて云へば分立の同一の構造を有しなければならぬと思ふのである。

扱て内と外との構造がかくの如きものであるとするならば、内的事實は單純にそれだけとして表はれ、若しくは觀られえないことは明かである。必ず外的事實を媒介としなければならぬ。外的事實が媒介となり、その否定を通してのみ達せられるのである。外的事實が、従つて感性的直觀がなければ内的事實、従つて自我の知的直觀もあり得ない。然し此の内の事實が見られる爲めに外的事實が否定せられると云ふこと、或は自我の知的直觀(自我の或は内的直觀をロマンタイケルに従つて知的直觀と呼んでおく)が成立つ爲めに感性的直觀が否定されるといふ事は如何なることであるか。

此の事を考へる爲めに吾々は兩直觀の本質及びその關係をもう少し考へて見よ

う。カントによれば感性的直観は、それによつて對象が吾々に與へられる所のもので、成程恐らくは對象がよつて以つて思惟せられる所の悟性とは共通の根幹より出てゐるものとは豫想はされるが、然し吾々には知られず、従つて全く峻別されるべき作用として考へられた。そして直観は全く思惟を含まず、思惟に云はば素材を與へ、思惟は直観せず、即ち自ら素材を産出することをせず、感性的直観によつて與へられたる素材を對象にまで統一するのである。従つて思惟は直観を要し、直観は又思惟を要する。自ら對象を思惟するが如き直観、もしくは自ら素材を産出する如き思惟（知的直観、直観的悟性）はカントでは人間には許されなかつた概念である。

然し吾々は今感性的直観をもう少し廣義に用ひたいと思ふ。勿論感官に基づく直観ではあるが、思惟的要素を全然含まぬといふのではなく——後に明かにする様に直観と思惟は單に反省的に峻別せられるのではなくして、成程一面に於いてはレアル、イデアールとして、一方は特殊であり、受容的であり、他方は一般的であり、創造的であると云ふ様に、分立的に、相互否定的に對立するものではあるが、他面に於いてはそれらはやはり絶對的同一を内容とするものとして、我は分立の同一にもとづくものとして直接に結びついてゐるものとして考へたい。此の點より云ふならば直

観は單なるレアルでなくレアル、イデアアルであり、思惟も單にイデアアルでなくやはりイデアアル、レアルであると云はねばならぬ——思惟的要素を、即ちイデアアルなものを、フュールジツヒにではなくとも含んでゐるものとして、従つて感性的直觀もその本源的内容より見ればレアル、イデアアルの分立の同一として考へたいと思ふのである。

直觀と云ふのは勿論對象との直接なる關係で、普通の用語で云へば主客の合一である。然し此の合一は單に我がなくなつて對象に没入するか、又對象がなくなつて我に歸一するとかいふことではなく、對象と我との分立に於ける絶對的同一でなければならぬ。

感性的直觀と普通に云ふのは然し、主觀と客觀との合一が尙ほ外的なるものによつて支へられてゐると考へられるもので、従つて此の合一は單に偶然的なるものと見られるものである。カントが感覺の起原を外的なる物自體に求めたのもかかる理由によるのである。

然し此の感性的直觀の主客(或はイデアアル、レアル)の合一が何故に偶然的と見られるのであらうか。此の偶然性は果たして何處より來るのであらうか。それは

此れに於けるレアー、イデアの分立の絶對性といふ事、即ちレアー、イデアの分立の同一が此れの内容ではあるが、此の分立に於いてレアー、イデアは全く各々が全體で獨立であるとして相互に否定するといふ構造を有するが故に、此の兩者の結びつきは、それら自身としてはあくまでも偶然的といふ意味を有せねばならぬからに外ならぬ。然し此れだけならば自我の直觀としての知的直觀に於いても同じことが云へる筈である。然るに吾々は自我の知的直觀についてはその合一は必然的であると考へるのである。此れは如何にしてであらうか。

感性的直觀はレアー、イデアの絶對的同一を單にレアー面を中心として眺めたものである、然るに自我の知的直觀は此れをイデア面を中心として眺めたものである。レアー面に於いて見ると云ふ事はものを特殊として見るといふ事、即ちものを外に向ふにあるものとして見るといふ事である。勿論レアー面を中心として見ると云つても感性的直觀も單にレアー面のみではない、やはりレアー、イデアの同一ではあるが、然し此れは此の同一を具體的に直觀せずして、それを引き離して——と云つても抽象的思惟の如く反省的に引き離すのではないが——云はばレアーを根を切つてそれだけとして直觀するのである。眞の全體で

なしに客観化されたる客観だけを切り離して、單にそこにあるものとして、單なる特殊として眺める。此の點に此の直觀の抽象性がある。レアル面を中心として見るといふ事はかかることを意味してゐる。従つてかかる直觀の背後には常に具體的なレアル、イデアール或は主観客観があると云はねばならぬ。此の自己の云はば眞の根基であるレアル、イデアールをかかるとして自覺しない所に、即ち自己自身の根基であり乍らそれを自己自身の中にあるものとして見ることの出來ない所に此の直觀の本質があるのである。

次にイデアール面に於いて見ると云ふ事はものを一般として、單にそこにはないものとして、即ちものを内に見ると云ふ事である。内に見るといふ事は決して對象とならないもの、有とならないものとして見るといふ事である。従つて感性的直觀がレアル、イデアールの絶對的同一をレアル面を中心として見るといふ事は此の同一を自己の外に、向ふに見るといふことになる。これが此の同一を物自體として外に、偶然的なるものとして見ることになる所以である。同様に知的直觀が此の同一をイデアール面を中心として見るといふ事は此れを全く自己の内に見ることになる。従つて自我の知的直觀に於いては合一が內的に従つて必然的と考へられ

るのである。尤も内的と云ふ事は必ずしも必然的と云ふ事とは同一ではない。内的と考へられる此の自我直観にも偶然性のあること後に明かな如くである。唯だ普通には内的であるが故に必然的と考へられるだけである。従つて知的直観の合一の必然性の眞の根據は、それが内的であると云ふ事よりも、むしろ知的直観がレアール、イデアールの絶對的同一として直接に一であると云ふ點に求める外はない。

然し乍ら感性的直観と雖も全然その合一が偶然なるものではなく、必然的なる一面を持つてゐるのである。感性的直観に於ける自發的創造性、感官の自由なる活動、藝術的直観への傾向等が此れを暗示してゐると思ふ。合一が必然的であると云ふ事はそれが吾々の中に於いて自由に働らくと云ふ事である。吾々がそれに外から強制的に拘束されて動くといふのでなく、吾々がその合一そのものに入り込み、それが自由に吾々と共に動くことではなければならぬ。極小にされてゐるとは云へ感性的直観と雖もかかる一面は持つてゐなければならぬと思はれる。

然らば此の感性的直観に於ける合一の必然性は何處より來るかと云へば、それはレアール面と雖も成程イデアール面に對しては絶對的分立であつて、全然獨立でなければならぬが——即ちそれはイデアール面の否定によつて始めてあるものと考

へられねばならぬが、然しそれらはその分立に於いて直ちに又深い同一なのである。レアル面もかかる同一の自己限定と考へねばならぬ。此の一面より云ふならばレアル面はイデアール面と直ちに同一である。感性的直観にも勿論此の一面がなければならぬ。此れがその合一を必然的たらしめる根據でなければならぬ。

一方知的直観もやはりその合一は單に必然的なるものとしてのみ考へらるべきではなく、その偶然的なる方面を見落してはならぬ。レアルとイデアールとの同一がイデアール面に於いて見られるのが知的直観であるが、此のイデアール面に於いて眺められるレアルとは何かと云へば、これは自我に於ける自我ならぬもの、自我に於ける根源的自然に外ならぬ。自我に於ける暗き自己の根柢である。前の感性的直観に於いては、かかる暗き根柢は物自體として外に見られたが、此の場合はいくまでも内に見られるのである。物自體ではなくして、云はば自我自體である。かかるものが自我に於ける自然として自我の奥に見られる。従つて感性的直観の偶然性は云はば外の偶然性、知的直観の偶然性は云はば内に於ける偶然性と云ひ得るのであらう。

此の點より見て自我は單にイデアールなものでなく、フイヒテなどの考へた如く

イデアール、レアールの二重の系列を有するものであることは明かであるが、然し此のレアールは單にイデアールの自己限定或は客觀化と考へられるべきではなくして、イデアールにとつてはあくまでも他であり、従つて偶然的な暗き自己の根柢として、自我に對して、云はば根源的な自然とも云ふべきものでなければならぬ。自我は従つて單に合理的なものではなくして、その内奥には決して割り切れざる剩餘としての自らの暗き根柢、絶對なる他があるのである。然しかかる根源的自然が果たして何であるかと云ふことについては後に考察しようと思ふのであるが、此れはイデアール、レアールの分立の絶對的同一の絶對否定の働きそのものに外ならないと思はれる。此れがイデアール面に於いて表はれ、自我に於ける自然としての暗き根柢と考へられるのである。そして自我が實踐的な立場から捕へられるならば、此れが同時に又汝として、自我に對する絶對の他として考へられるのである。

扱て次に此の感性的直觀と知的自我直觀との關係について考察しよう。前に述べた様に兩者の關係は極めて大略的に云へばレアール、イデアールの分立の同一の關係として見ることが出來ると思ふ。感性的直觀はレアールであり、知的直觀はイデアールであり、而してレアールはレアールである限りイデアールでなく、イデアール



ルはイデアールである限りレアルでない。具體的に云へば感性的直観がある所では凡てが物であり、自然であつて、自我はなく、又知的直観がある所には、そこには自我があり、否自我が凡てでなければならぬ。兩者はその限り、相互否定的に、分立的に成立つのであるが、然し此の絶對的な分立は直ちに又絶對的な同一でなければならぬ。此の分立が直接に同一なのである。感性的直観が直ちに知的直観なのである。

絶對的分立の關係から云へば感性的直観が成立つ爲めには知的直観は否定されねばならぬ、換言すれば物もしくは經驗的事實がある爲めには自我或は内の事實は否定されねばならぬと同様に、知的直観が成立つ爲めには感性的直観が否定されねばならぬ、即ち内の事實が見られる爲めには外的或は經驗的事實が否定されねばならぬのである。然し吾々は此の否定を通して更に積極的なることを知るのである。それは即ち此の否定の積極的なる意味であつて、此の分立の絶對的同一に外ならぬ。否定は單に相對的にレアルがイデアールを、もしくはイデアールがレアルを否定するのみではなくして、その底に絶對的否定としての絶對的同一が働いてゐるのである。レアルがイデアールを否定するのはレアルを通して絶對的同一が否定するのであり、イデアールがレアルを否定するのはイデアールを通して絶

對的同一が否定するのである。絶對的同一が兩者の眞の内容をなすのである。絶對的同一は、それ故にも早やレアル面を中心として見られた經驗的事實や、イデアール面を中心として見られた内的事實に對して、レアル面即イデアール面として見られる所に眞に具體的なる姿に於いて表はされるのであつて、かかる直觀を吾々は絶對的直觀と呼ぶならば、絶對的直觀に於いて始めて絶對的同一が眞にあるがままの姿に於いて見られると云ふことが出来るであらう。かかる直觀に於いて見られる事實を吾々は積極的事實と呼びたいと思ふ。

内的事實は勿論經驗的、外的事實とは同一ではない、然し全然別個の事實であるのではない。外的事實を離れて全然別に内的事實が獨立に存在すると云ふのではない。此の所謂感官につながる外的事實以外に何も無い、此れが直ちに内的事實の意味を持つのである。外的事實即内的事實となるのである。積極的事實といふも從つて此れら外的事實以外に、或は内的事實以外にある別個の存在では勿論ない。此の外的事實即内的事實と云ふこと、或は外的事實が直ちに内的事實に移り行く所に積極的事實が見られるのである。

レアル面が即イデアール面であり、イデアール面が即レアル面であると云ふ直觀即ち

絶對的直觀は單に眺める、或は見るといふ如き普通の觀想的な意味での直觀ではなくして、後にも説く如く、全く行爲的なる意味を持つたものと考へられる。感覺や概念などによつて見られる世界ではなくして、行爲によつて見られる世界であり、又同時に行爲を限定する世界である。此の意味に於いて眞の知的直觀としての絶對的直觀はむしろ行爲的直觀といふ事が出来るであらう。積極的事實と云ふのは、従つて又行爲的直觀によつて見られる所の事實と云ふことが出来る。

要するに積極的事實は、例へば實證論などに於いての如く單に感官的な經驗的直觀のみに表はれる事實ではなくして、——かかるものは積極的事實の一面的抽象である——最も深き直觀に於いて見られる事實、最も具體的な事實でなければならぬ。眞の直觀といふのは單に對象的に主觀と客觀との合一、我と物との同一と云ふが如きものではなくして——勿論此の事も直觀の一面ではあるであらうが——更にそれは矛盾、もしくは否定を、従つて辯證法的運動を包み、それを基礎づけると云ふ意味を有してゐなければならぬ。直觀の深きノエシスの意味は、一つのものが直ちに他となる、一が自己自身の内から他に移り行くといふことになければならぬ。その間に兩者を媒介する何物かがあると考へられるならば、それはも早や直觀ではな

い。然しかかることが考へられる爲めには、「一つの底に絶對の他があると考へられねばならぬ。」私は私自身の底を通じて他である。此れが主と客との一である。云ふことの眞の意味である。レアルなるものが直ちに絶對他なるイデアールに移り行くこと、而かも此の間に絶對に媒介なき故に、レアルは絶對に死することによつてイデアールに蘇るといふこと、此の絶對分立の直觀に於いて直觀の眞の意味が表はされるのである。

尙ほ積極的といふ概念については、事實的なるもの、與へられたるもの、確實なるものと云ふ意義を有することは云ふまでもないが、尙ほその他に——そして此れこそシェリングの積極哲學に於いて最も強調せられたのであるが——主張的 *belauptend* と云ふ意義がある。即ち積極的事實とは事實自らが確實なるものとして、自らを主張せんとすることを含んでゐる。即ち此の意味から見ても、かかる事實はその根柢に於いて意志的、行爲的なる意義を有することが明かであると思ふ。(XIII, S. 133) 然し積極的事實の内容の考察については第四節にゆづり度いと思ふ。

## 三

カントに於いては直觀は唯だ感性的直觀であり、思惟は此れによつて與へられた

る素材を對象的に統一する範疇的思惟、或は悟性的思惟であつた。カントも此の兩者を決して獨立的に働くものとは考へず、兩者は常に結びついてゐるものとした。然しカントにあつては此の兩者は機能としてはあくまでも異なるものであり、而かもかかるものが常に結びついて働かねばならぬといふ所に人間認識の本質があつた。然し全然異つたものが何故に結びつくのであるか。その根據はどこに求めらるべきであらうか。恐らく共通の根幹から出てゐるであらうとは想像されるにしても、此の根據はカントにあつては人間認識を超えてゐると見做された。然しかくの如き直觀と思惟との關係もかの分立の絶對的同一を手がかりとして考へることが出來ないだらうか。

思惟についても色々考へられるであらうが、思惟の最も深き理解は、やはり特殊を自己の否定的限定として有すると考へられる辯證法的思惟でなければならぬと思ふ。即ち特殊としてのレアールと一般としてのアイデアールとの分立的同一としての絶對的同一の働が具體的な思惟の働でなければならぬ。分立の同一は直觀のみならず、思惟そのものの構造でもあるのである。思惟の辯證法的性格もその本質は此處にあると思はれる。辯證法といふのは唯だ單に對象的に對立する所のものを

第三の同じく對象的なるものに於いて統一し、更に此れと又他の對象的なる或物との對立を又他の對象的なる或物によつて綜合、統一するといふが如き働きを云ふのではない。勿論かかる働きも眞の辯證法的な働きを根基とすることによつて始めて行はれるものではあるが、かかるものは眞の辯證法の云はば對象面に落されたる影にすぎない。辯證法をかく外的に、過程として考へることが眞の辯證法を捕へ得ない様に、内的な過程として考へることも尙ほ充分な理解ではないと思ふ。例へば單なる自我の自己限定の過程として、即ち自我の内に於ける自我と非我との矛盾對立の綜合として、或は單なる内的事實の推移として考へる如き、過程の辯證法であつてはならない。過程の辯證法といふのは他面より云へば媒介の辯證法であり、連續の辯證法である。矛盾するもの、對立するもの、の間に媒介を入れることによつて兩者を綜合し、連續せしめんとするのである。而かも對立するものは對立するものである限り、矛盾するものである限り、いくら媒介を挿入するとしても、依然として對立であり、矛盾である。かくて媒介は無限に續き、過程は無限にのびる。

此れに反して眞の辯證法は過程的辯證法ではなく、分立の絶對同一としての辯證法でなければならぬ。媒介を入れることによつて對立を緩和するのではなく、媒介を

むしろ脱落せしめることによつて對立を絶對化するのである。而かもかかる無媒介の絶對分立に直面する事によつて却つて眞の同一に飛躍するのである。眞の辯證法は飛躍の従つて分立の辯證法でなければならぬ。此の辯證法は過程的な、ノエマ的な辯證法に對して云へばノエシ的な辯證法と云ふことが出来るかも知れぬ。然らばかかる辯證法としての思惟と眞の直觀としての絶對的直觀との關係は如何であるか。

辯證法は矛盾或は對立を豫想する。矛盾のない辯證法は考へられない。普通に云ふ對立或は矛盾は、それらが對象的に考へられるのみならず、その綜合、或は媒介までも對象的に考へられてゐる、或は逆に對象的なものに於いてのみ對立及び綜合が考へられると云つてもよいであらう。對立が對象的に考へられるといふ事はそれが分量上、程度上のものとして見られることであり、従つて對立の間に無限なる媒介挿入の可能を認めることである。無限に媒介を挿入することによつて此の對立の溝を埋めつくして連續的にせんとすることである。シニリングの同一論期に於いてイデアール、レアーラの對立を量的差別として説明せる如きはかかる考方の表はれと見ることが出来る。

對立が始めからかく量的、相對的なものと考へられるならば、かくの如き考方によつて對立は綜合され、止揚されるかも知れない。然し眞の對立は決してかかるものではないであらう。如何に媒介を挿入するも決して埋めつくすことの出来ない溝を持つてゐるのである。否、あらゆる媒介を否定する意味を持つてゐると考へられねばならぬ。單に溝があると云ふよりは、むしろ眞の對立は對立の一方が死するのでなければ決して他は生きることが出来ないものでなければならぬ。對象的に溝をへだてて對立するといふのではなくて、對象的に實現されたものとしては常に全にして一なるものである。然しそれが實現される行そのものに於いて、即ちノエシス的側に於いて、これかあれかの對立即ち分立があるのである。従つてかかる對立の綜合は前の場合の如く外から何か媒介を挿入するといふ如きものではなくして自らの死することそのことが他の生きる所以となるのである。此の間には何物も介入しない、するを要しない、全く無媒介の合一である。むしろ外から附加せられたる種々の媒介物を脱落せしめて絶對的な對立、従つて絶對的な死そのものに直面することこそ最肝要である。ノエマ的な對立に於いては、對立そのものが直ちに同一であるとは云ふことが出来なかつた。何となれば對立はその間に無限の媒介が



挿入されることによつて始めて連続的に結びつけられることが出来るからである。然るにかくの如き云はばノエシスのなる對立即ち分立に於いてはそうでない。如何なる媒介も許さないのである。媒介は何の要もないのである。唯だ一方が否定されるものが直ちに他方のある所以である、分立することが直ちに對立の眞の同一を得る所以である。

眞の辯證法はかくの如き意味を有せねばならぬと思はれる。そしてかくの如き構造は直ちに又最も具體的な直觀としての絶對的直觀のそれでないならばならない。即ち分立の同一といふことは最も具體的な生の直觀としての絶對的直觀の形式であると共に又かかる生の反省としての辯證法的思惟の形式でもあると云はねばならぬ。

辯證法が單にノエマ的でなく、眞の對立を自覺したノエシスのものとして考へられる限り、分立の同一としての眞の絶對的直觀(行爲的直觀)とは一つのものとして見られるかと考へられる。共に全く媒介を許さない云はば飛躍的統一でなければならぬからである。然し乍ら辯證法としては、成程その對立は今も見た如く、絶對無媒介的な飛躍的なものとして見ねばならぬとしても、それが思惟としてはあくまでも

媒介を見出さんとする所にその本質があるのではなからうか。思惟は一面から云へばどこまでも媒介的根據を求めるのが本性であると思ふ。而かも辯證法としては此の媒介を否定する意味を有するのである。即ちそれは媒介を否定するものであり乍ら、媒介を求めんとするものと云ふことが出来る。辯證法的思惟は此の意味に於いてそれ自身又深い矛盾そのものであると云はねばならぬ。

然し知的、むしろ絶對的直觀としては何處までも媒介がないと云ふ所に本質があると思ふ。辯證法の本質はやはり媒介性であり、直觀の本質は無媒介性である。然し勿論此の辯證法の媒介性も、普通の思惟の媒介性の如き單なる有の媒介でなく、云はば絶對無の媒介と考へねばならぬことは云ふまでもない。媒介を絶對否定、絶對無と考へることによつて、始めて眞の對立の意義が明かになり、同時に思惟の要求も充されると云ふべきである。

直觀としては媒介が絶對にないと云ふ事が却つて兩者の眞の同一を與へるのであり、一方からその底に徹することによつて直ちに他に移り行く所に、換言すれば最も直接なる同一にその本質を見ることが出来ると思ふ。然し兩者は決して二つの別個のものではなくして、直觀はそれのレアル面、思惟はそれのイデアアル面で

あるにすぎないと考へられる。

#### 四

扱て事實と云ふものについては第二節にのべた様に第一に先づ外的事實即ち所謂經驗的事實が考へられ、次には内的事實即ち自我或は意識の事實が考へられる。然し乍ら此れらの事實は夫々別個の事實として、若しくは存在としてあるのではなく、此れらは實は一つの積極的なる事實の抽象的限定によつて見られるものであつて、眞にあるものとしては此の積極的なる事實の外にはないのである。

ジェリングは凡ての理性哲學を消極哲學と呼び、此れは唯だ物の一般的なる本質又は概念を明かにするのである、たとひ存在を問題にする場合にも唯だ存在の内容——例へば感覺や概念の分析等によつて——を理解するのみで、それが存在すると云ふこと、かく存在して他様には存在しないといふこと、かかる事は決して明かにし得ない、物の *Was*, *Wesen* は勿論それなくしては物は考へられないものであるが、然しそれは物の單に消極的なものにすぎない、*Was* 或は *Wesen* は物が存在するとせざるには關係がない、假定せられ或は想像せられたる物についての *Was* も存在するものについての *Was* も *Was* に關する限りは區別はない、然し一方は存在し、一方は存在

しない、此の物をして眞に存在せる物たらしめるものが即ち *Dasein* に外ならぬ。此れは物に於ける積極的なるものである、此の積極的なものを明かにするのが積極哲學である、と説いてゐる。そこで吾々も積極的事實を問題にする限り、彼の積極哲學に觸れなければならぬが、彼の積極哲學は神話及啓示の哲學と稱せられることから明かな如く、多分に神學的色彩を帯びたものであるが故、今は唯だその一般的、本質的方面のみに觸れるに止めたいと思ふ。<sup>(1)</sup>

(1) シェリングの積極哲學の内容については拙稿「シェリングの積極哲學について」(哲研、昭、七、十、以降)参照

物に於ける積極的なるものたる此の *Dasein* 即ち物の存在とは如何なることであるか。此れは既にカントも明かに認めた如く(純粹理性批判、神の存在についての本體論的證明の不可能について)全く思惟或は概念に先立つ所のもの、理性以前のものと考へねばならぬ。理性は決して自らより現實的な存在、此の現在の存在例へば此の樹木、此の石の存在を洞察し、證明することは出来ない。若し理性が單なる可能的なるもの、唯だ概念の中に見出された對象ではなしに、此の現實に存在する對象を欲するならば、理性は所謂感官の權威に歸服しなければならぬ。感官の證明は一つの權威に外ならない。何となれば吾々はそれによつて物の單なる自然 *Natur* からは、從つ

て理性からは洞察することの出来ない所のもの、即ち現在の存在、此處にある此の樹木を確認するが故である。(XIII, s. 177) 従つて純粹なる事實 *reines Dass* と云ふのは理性或は概念の外なる存在であり、絶對的に表象されたもの *das absolut Vorstellte* と云ふことが出来る。

かかるものは思惟され得ないと非難されるかも知れない。成程思惟されたものは既に思惟の中にあるもの、従つても早や純粹事實<sup>ライネス</sup>ではなくして、既に *Was* であるかも知れない。然し思惟がそれから始る所のもの、思惟の出發點は、それから思惟が始まるのであるからそれ自身はも早や思惟ではあり得ないと云ふことが出来る。かくて純粹事實は思惟に對立する所のもの、思惟以前のものであるのみならず、それから思惟が始まる所のものなのである。即ち絶對的なるプリウス *Prins* である。(reines *Dass* を絶對的なプリウスとして理解する爲めには單にそれが思惟の外であると考へるだけでは勿論不充分である、此の點については後に考察したい) 成程消極哲學に於いても、即ち理性の中に於いてもプリウスはある、凡ての對象がそれからアブリオリに理解せられる所の原理がそれである。然しかかるプリウスは消極哲學に於いて考へられる限り、それはあくまでも理性の中に於けるプリウスである、單にポテ

ンツ Potenz である。成程それによつて構成され、統一される經驗や概念に對しては超越的ではある、その意味に於いて勿論ブリウスたるべきには相違ないが、然し絶對的に超越的なものではない、やはり尙ほ理性の中に於けるブリウスたる限り、單に相對的に超越的なブリウスにすぎぬ。所が積極哲學に於けるブリウスは絶對的に超越的なものでなければならぬ。

消極哲學に於けるブリウス即ちポテンツから存在或は經驗(いつても理性の中に於けるそれであるが)への移り行きは全く必然的な、思惟或は概念それ自身の力による移り行きであつたが、此のブリウスからの經驗への或は又理性への移り行きは決してかかるものではない。それは絶對自由の行爲として考へられる。此の移り行きは理性の移り行き(内面的必然)ではなくして行爲の移り行き(自由なる創造)である。

唯だ存在するとしてより外考へられない所の絶對的な *Das* はかくの如き絶對的なブリウスとして考へることが出来るが、此れは然し所謂神ではない、後に神として認識否實證せられるものではあるが、然し尙ほ神ではない。何となれば神としてはそれは單に存在するのみではなく、絶對に存在する所の精神、即ち理性にまで高めら

れて來なければならぬからである。單に存在するものとしては、それはあくまでも理性の外のものでなければならぬが、理性の外のものを立てる所以は、それが再び理性に於いて高き存在を得んが爲めに外ならぬ、存在が單なる理性の中の存在に終らざらんが爲めに外ならぬ。

此の點よりして消極哲學と積極哲學の媒介に對する關係が明かとなると思ふ。

消極哲學即ち理性哲學はあくまでも理性以外に出ることがなく、その媒介そのものも理性の中のものである。凡てが概念及び理性の中に動いてゐるのである。積極哲學即ち非理性哲學といつても理性的なるものを凡て拒斥するといふのではないに於いては媒介はも早や理性ではなく、理性を越えたもの、理性の外なる根源的存在となるのである。此れが絶對的プリウスである。積極哲學に於いては理性は眞に高き存在を得る爲めに自らの外に出るのである。積極哲學が優れたる意味で經驗論と云はれる所以も此處にあるのであつて、その經驗論たる意味は、それが唯だ經驗的事實以外のものを認めない、といふ事ではなくして、その媒介が單なる概念、單なる理性などではなくして存在そのもの純粹なる經驗そのもの、世界そのものである、といふ事、經驗に於いて現はれるものそのものが哲學のエレメントとなり、共働

者となる」(XIII. S. 130)と云ふことである。哲學は事實そのものから離されるのではなくして、事實そのものに入り込んで行くのである。事實がむしろ哲學の一面、一契機となるのである。此の點に於いて哲學そのものに對する考方が消極哲學とは異つてゐることが明かである。

然らば此の單なる理性の事柄でない所の物の *Das* を確證する所の經驗とは如何なるものであるか。如何なる經驗がかかる純粹なる事實を與へるのであるか。

それは單なる感官或は感性的經驗であらうか。成程感官はたしかに理性とは別種の權威を持つてゐる。理性によつて與へられない或物を與へる。感官がなければ確かに吾々は物の存在をたしかめ得ないであらう。純粹事實は感官によつて與へられる様に見える。然し感官の立場或は感性的經驗の立場といふものは全く內在的な、或は獨在的な立場である。超越的なものを全く排除する立場である。理性から云へば感官は全く超越的で、従つてその意味に於いて全く理性の外の存在性を與へる様に見える。然しそれは唯だ理性に對してのみである。感官の立場のみに立つ限りに於いては例へば感官的實在論や實證論に於いての様に超感的なるもの一切を拒斥せざるを得ないことになるであらう。従つて此れによつて或は事實<sup>ズ</sup>與<sup>ス</sup>



が與へられるとしても、此れから如何にして本質に移り行きうるであらうか。かかる本質を認めることさへ單なる感官の立場としては不可能なではなからうか。

然らば此の事實を與へる經驗とは如何なるものであらうか。單なる感官ではないとしても感官を離れたるものとは考へられない。感官を全く離れたる理性では唯だ本質が與へられるのみで、事實は全然與へられない。然し事實から本質へ移り行きうる爲めには——勿論單に理性の中での移り行きの様に必然的な移り行きではないが——やはり理性をも包む立場が求められねばならぬ。感官に結びつきつ理性を拒まない經驗、吾々はかかるものを唯だ行爲としての外には考へることは出来ない。

勿論事實を與へる經驗として、例へば神祕的經驗の如きものを考へることも出来るかも知れない、即ち外的事實に於ける啓示や或は内的事實としての神祕的體驗が考へられるかも知れない。然しかかる經驗は成程經驗として、事實を與へるであらう。然しその事實は全く本質概念的反省を離れてゐるか或はそれを拒斥するかであつて、従つて感官の場合と同様に、やはり本質への移り行きが不可能であり、かくて又かかる事實に關する哲學の成立つことをも不可能にせしめるであらう。

かくて眞に事實を、そして又事實より本質への移り行きを確證しうる經驗とは正  
に行爲であると云はねばならぬ、行爲こそ最も優れた意味で經驗である。感官も又  
理性も行爲としての意義を有し得て、始めてそれらは眞に經驗としての意義を有し  
うるのである。思惟もそれが行爲として考へられる限りは、やはり經驗たり得る。  
思惟の經驗といふことも考へうるのである、即ち此處にも思惟なる行爲によつて與  
へられる事實があるのである。行爲によつて事實が與へられ、行爲によつて事實か  
ら本質へ移り行くのである。

然らばかかる行爲とは果たして如何なる行爲であらうか。行爲とは勿論單なる  
肉體的運動でも、又單なる意志や理性の働でもない。一面に於いては感官に結びつ  
き、従つて肉體的運動であり乍ら他面に於いては理性に結びついてゐる所の働であ  
る。即ち一面ではダスであり乍ら他面ではヴァス、或はレアールであり乍らイデア  
ールなものである。而かも此のダスとヴァス、レアールとイデアールとの結びつき  
は決して一つの線によつて兩端が結びつけられてゐる如き連續的なる合一ではな  
くして、やはり今迄のべた如き、レアール、イデアールの分立の同一の關係として理解  
されねばならぬ。ダスとヴァスとは全く分立的に相互に否定し合ひつつ、而かも直

接に同一なるものとして、合一してゐなければならぬ。ダスとしては、それは獨立的な全體であり、ヅアスとして又同じく獨立で全體である、ヅアスの否定によつてダスにはあり、ダスの否定によつてヅアスはある。行爲の本質はかく絶對否定によつて超越的な全體としての同一的根基を實現するといふ事、むしろ同一的根基の絶對自由の否定の働きによつてレアールに死してイデアールに蘇るといふ所にあるのである。

行爲としては凡て皆かかるレアール、イデアールの或は死即生の分立の同一なる構造を有するものであるが故に、感官そのものさへ行爲として見らるる限り、かかる構造を持ちうると思ふ。即ち感官にも感官のレアールなもの即ちそのダスとイデアールなもの即ちそのダスとが有り得るが故に、ヅアスは必ずしも所謂理性のみのものとは限らぬと思ふ。例へば感官的な赤に對して赤の本質、赤一般の如きものは感官のヅアスと考へられる、行爲としての感官は此これらのダスとヅアスとの分立の同一として考へられる。思惟についても同様のことが云ひ得る。思惟のダスとは感官に結びつく具體的な思惟作用、そのレアール面、思惟のヅアスはその内容、所謂本質、そのイデアール面である。

普通には行爲を唯だ内在的な作用として、それに對して超越的な價值或は當爲を考へ、行爲とはかかる超越的當爲或は價值を承認、もしくは拒否するものとして考へられるが、然し此の關係が全く超越的であるならば兩者は如何にして關係するのであるか。又それらを唯だ共に同一場所に於いて直接に合一せる一つの線の兩端の如くに考へるならば、價值の超越性、客觀性は如何にして考へられるであらうか。

行爲に對して價值はあくまでも超越的であると共に内在的でなければならぬ。ダスとヴァスの絶對分立の側から云ふならば、兩者の超越性は勿論認めねばならぬ、その絶對同一の側から云ふならば、その内在性は眞理でなければならぬ。行爲は分立の絶對同一として、此の矛盾の合一と考へられるのである。かくの如き構造を持つ行爲によつて始めてダスが與へられ、従つて又ヴァスへの移り行きも認められるのである。

然し乍ら等しく行爲と云つても種々の段階を區別することが出来る。前に述べた感官や理性の如き知的なる働も或る意味に於いて行爲と考へられるが、その他、感情的なる働も亦行爲として考へられる。例へば前に經驗の一つとして述べた神秘的經驗によつて與へられるダスは神秘的な感情そのものが行爲的意義を持つこと

によつて與へられるダスと考へてよいであらうと思ふ。

然し眞に行爲としての行爲、即ち眞に實踐的な意義を持つ所の行爲は意志的行爲と考へられる。前のものは知的なる働及び感情的なる働によつて見られるダスであるが、此れは意志的なる働によつて、即ち本來の意味に於ける行爲によつて見られるダスであると云つてよい。かかる行爲によつて見られる事實といふのが最も深い意味に於ける直觀——行爲的直觀の事實と云ふことが出来る。尤もかくの如き、行爲としての行爲によつて見られると云つても、決して感官的なる意味がなくなるのではない、もしそうであるならば行爲といふ意味さへも無くなるであらう。感官的意味がなくなるのではなくして、感官に於ける行爲的意義が純化せられたものと考へられるのである。

シエリングの云ふ絶對的プリウス、即ち絶對的に存在する事實として考へられるものは、かくの如き絶對的な直觀としての行爲的直觀によつて與へられるものであるらうと思ふ。感官と理性との分立の絶對的同一としての行爲の事實は勿論、理性を越えたものと云はなければならぬ。而かもその超越は單に感官に對する如く、相對的なものではなくして、——何となれば感官は理性を否定し、理性は感官を否定する

意義を有するが、然し各々はあくまでも他なくしてはあり得ない所のものであるからである——それらの相對的否定を否定するものとして、絶對的なる意義を有するのである。従つて積極的事實とはかかる絶對的同一の絶對的行爲、即ち絶對否定によつて與へられる事實である、と云ふ事が出来る。

シエリングは此の事實を最も深い意味に於ける啓示の事實に見たのである。かかる事實は一面から云ふならば、事實が事實自身を限定すると云ふ外はないが、然し他面から云ふならば、これこそ神の啓示であると見られる。啓示と云ふのは勿論歴史上の或る一定時に於ける超自然的、超現實的出來事には限らない。廣義に於いては、かくの如き絶對的なる直觀の立場に立つならば、凡てが永遠の意味を持ち、一一の事實が皆絶對なるものとして現はれる。即ち啓示は到る所にあると云はねばならぬ。否むしろ凡てが啓示であると云はねばならぬ。エツクハルトの様に清貧の心だにあるならば、行住坐臥神は常に我の中にあると云ひうるのであらう。我のはからひを凡て投げすて、ひたすらに絶對他力に隨順する生活に於いて見られる所の自然法爾の世界、或は禪家の所謂平常心是道也の平常の事實も、勿論宗教的側面からではあるが、かかる積極的事實を云ひ表はしたものと考へられる。此處に實は最も

深い矛盾の統一があると云ふことが出来るのである。

かく考へるならばダスの世界と云ふのは一見考へられる様に、吾々から最も遠い抽象的なる世界ではなくして、吾々がそれに於いて在り、それに於いて生きる所の世界、最も深い意味での社會、或は原始歴史的世界と云はねばならぬ。眞のダスはヴァスを自らの外に排除するのではなくして、ヴァスをも包む所の絶對無の場所と考へねばならぬ。此の意味に於いて積極的事實とは唯だ現在が現在自身を限定する所に、即ち最も具體的な「今」に於いて見られる所の事實であると云ひうるであらう。(終)

(昭和九年十一月五日)